

道真『菅家文章』『菅家後集』の漢語研究（其二・『全唐詩』に稀少な疊語篇）「瑩瑩」「芬芬」「懔懔」「脛脛」

——併せて川口久雄氏校注旧大系本の字体「瑩」を検証する——

中山 大 輔

一、はじめに

本稿は、平安前期に活躍した菅原道真の漢語研究の一環として、その漢詩漢文集『菅家文章』『菅家後集』中に用例のある漢語疊語——「瑩瑩」「芬芬」「懔懔」「脛脛」の四語——について、中国での用法に沿っているか、典拠資料が探り得るか、あるいは、何らかの和習を帯びていないか等について考察を試みるものである。

これまで本稿執筆者は、菅原道真の用いた漢語について調査を進めてきた（安部・中山（二〇二二）、中山（二〇二二甲）（二〇二二乙）（二〇二二三））。本稿では、『菅家文章』『菅家後集』の漢語疊語の調査の一環として、特に『全唐詩』に用例がほとんど見られない語について焦点を当てていく。

本稿で取り上げる「瑩瑩」「芬芬」「懔懔」「脛脛」の四語は、いずれも『菅家文章』『菅家後集』中では詩において用いられ

ている。しかし、その道真とほぼ同時代の中国唐代の詩を網羅した『全唐詩』（四万八千首以上収録）には、四語共、四例以下しか用例がなく、少なくとも中国の詩壇においては余り用いられなかった語であると考えられる。そうした言わば特殊な語彙を、道真は正しく中国の用法に沿って用いていたのか。本稿では、中国でも詩に用いられる事が稀だった語をも巧みに詩に詠み込んだ、道真の語彙の豊かさの一端を報告してみたいと思う。

また、調査の過程において、川口久雄氏校注旧大系本では「瑩」と翻刻されている『菅家文章』巻二の箇所について、諸本の調査から本来は「瑩」（冠の下に「冫」が入る）であった可能性が高いことが判明した。そこで、川口氏校注旧大系本では何故「瑩」の字体で翻刻されたのか、原因を検討したい。

なお、漢語疊語を取り上げるといって、前稿の中山（二〇二二甲）・中山（二〇二二乙）の続篇でもあるので、本稿から

は題名を「道真『菅家文章』『菅家後集』の漢語研究」とし、連番（其二）を付して整理をしていくこととする。

【凡例】

◆底本

『菅家文章』『菅家後集』は『日本古典文学大系七二 菅家文章 菅家後集』、『全唐詩』は『全唐詩検索系統』を底本とし、その他は題名下に底本名を都度括弧「」書きで示した。

◆用例収集は主に以下に拠った

『全唐詩検索系統』、『唐宋詩全文資料庫』、『宋詩（元智大學）』、『漢籍電子文献資料庫』、『中国哲学書電子化計劃』、『佩文韻府』、『大漢和辞典（修訂第二版）』、『漢語大詞典』、『日本国語大辞典（第二版）』

◆略称（太字）

【文章】＝『菅家文章』、『後集』＝『菅家後集』、『川口大系』

＝川口久雄校注『日本古典文学大系七二 菅家文章 菅家後集』、『大漢』＝『大漢和辞典（修訂第二版）』、『漢詞』＝『漢語大詞典』、『日国』＝『日本国語大辞典（第二版）』

◆用例文の掲載については、以下の記号を使用した

◎＝【文章】『後集』の用例（『川口大系』の作品番号も付し、当該置語についての注釈も引用した。）

○＝【文章】『後集』以外の用例

底本に訓読文や訓点が付されているものについては、そちらも引用した。振り仮名も必要に応じ、底本のもの

引用した。

◆その他

旧字体については、解釈に影響のない限り新字体に換えた。用例・引用文の傍線等は、特記の無い限り本稿執筆者が付したものである。

二、『菅家文章』卷二「講書之後、戲寄諸進士」の「榮榮」

二—（一）、【榮榮】の意味と中国文献例

【榮榮】は【文章】中に一例のみ見られるが、『全唐詩』においては四例しかなく、唐詩には余り用いられなかった語であると考えられる。まず【文章】の用例から確認する。

◎【菅家文章】卷二 八二「講書之後、戲寄諸進士」※訓読も

底本準拠

我是榮榮鄭益恩

我はこれ榮榮たる鄭益恩

曾經折桂不窺園

我曾折桂を経て園を窺はずありき

文章暗被家風誘

文章は暗に家の風に誘はる

吏部偷因祖業存

吏部は偷に祖業存するに因る

勸道諸生空赧面

勧め道ふ 諸生空しく面を赧めむより

従公万死欲銷魂

公に従ひて万死 魂を銷さまく欲りせよ

（後略）

【川口頭注】「孤独で頼るところのないさま。」

【川口補注】「道真に兄弟のないことをいう。『博士難』に「日

悲汝孤惇」とある。」

『川口大系』の当該箇所では「榮榮」は、「𦉰(ワ冠)」の省かれた「榮」の字体で翻刻・訓み下しされていたが、その字体の相違については次節で詳述する。一まず本節では、『大漢』等の辞書で通用字体とされる「榮榮」で表記を統一したい。

「榮榮」については、『川口大系』頭注で「孤独で頼るところのないさま」と解釈されている。「榮榮」の係る「鄭益恩」は、『後漢書』卷三十五「張曹鄭列伝第二十五鄭玄」に登場する鄭玄の一人息子の名である。『川口大系』補注にも指摘があるとおろ、兄弟がいなかった(坂本(一九九〇)一八頁)とされる道真の孤独を重ね合わせていると考えられる。ただ、孤独とは言え道真に妻子はあったため、ここでの「榮々」は、特に兄弟のいない孤独を表したものと考えられる。

「榮榮」の辞書語釈については以下の通りであった。

〔榮榮〕辞書語釈

『大漢』①「孤独で頼るところのないさま。嬾嬾。②うれへるさま。③驚き恐れるさま。」

『日国』「孤独なさま。孤独な気持でいるさま。惇惇(けいけい)。」

『漢詞』「孤零貌。」

以上の通り、概ね「孤独」の意味で解釈される語であると言

える。『大漢』にのみ「孤独」とは異なる「うれへるさま」「驚き恐れるさま」と言った解釈の記載もあったが、『文章』の本用例では文脈上「孤独な」の意味が適切かと思われる。ただし、辞書語釈では『文章』例の様な「兄弟がいらない」と言った孤独の性質については限定はされていない様である。

次に、中国の詩作品において「榮榮」がどの様に用いられていたのか確認してみたい。『全唐詩』には「榮榮」の用例は四例あった。以下年代順に掲載する。

○『全唐詩』卷九四 齊澣「長門怨」(全文)

榮榮孤思逼 寂寂長門夜

妾妬亦知非 君恩那不借

携琴就玉階 調悲声未諧

將心託明月 流影入君懷

○『全唐詩』卷二七七 盧綸「綸与吉侍郎中孚、司空郎中、曙

苗員外筓、崔補闕峒、耿拾遺漳、李校書端、風塵追遊向三

十載、數公皆負當時盛称、榮耀未幾、俱沈下泉。暢博士当

感懷前蹤、有五十韻見寄、輒有所酬以申悲旧、兼寄夏侯侍

御審、侯倉曹釗」(部分)

相逢十月交 衆卉飄已零

感旧諒戚戚 問孤肯榮榮

侍郎文章宗 傑出淮楚靈

掌賦若吹籟 司言如建瓴

○『全唐詩』卷四六九 長孫佐輔「関山月」(部分)

去歲照同行 比翼復連形

今宵照獨立 顧影自榮榮

餘暉漸西落 夜夜看如昨

借問映旌旗 何如鑿帷幕

○『全唐詩』卷四九四 施肩吾「收妝詞」(全文)

斜月朧朧照半床 榮榮孤妾懶收妝

燈前再覽青銅鏡 枉挿金釵十二行

四例中、齊澣・盧綸・施肩吾の三例で同句中に「孤」を伴って用いられている点が注意される。「孤」の無い長孫佐輔の例でも前句に「獨立」とあり、唐詩における「榮榮」はほぼ「孤独なさま」を表す疊語として用いられていたと考えてよいかと思われる。齊澣・盧綸は盛唐末、長孫佐輔・施肩吾は中唐期の人物であり、いずれも道真(活躍時期は中国の年代としては晩唐後期に当る)以前の人物である。

この他「榮榮」の用例としては、『詩経』一例、『春秋左氏伝』一例、『漢書』三例、『後漢書』五例、『晋書』六例の計十六例が確認でき、秦漢以前から屢々用いられる語であったと考えられる。以下『詩経』と『後漢書』の用例をそれぞれ一例ずつ挙げる。

○『詩経』「周頌 関予小子」「新釈漢文大系一一二 詩経

下」※訓読も底本準拠

関予小子 遭家不造 関びんなる予小子 家の造せざるに遭ひ

嬖嬖在疚 嬖けいけい嬖として疚きうにあり

於乎皇考 永世克孝 於乎皇考 永世に克よく孝せん

(後略)

「嬖」は「榮」の仮借字とされ(底本語釈)、また、この『詩経』の一節が「榮榮在疚」として『漢書』卷八十一「張孔馬伝」にも引用されているため、「榮榮」の一例と見なしたい。「遭家不造 嬖嬖在疚」の二句は、底本によると「家が(祖霊を)祭らない時期の後を受け、ひとり孤独にわずらう。」の意味であり、「嬖嬖在疚」は他に血族のいない孤独を表していると考えられる。

○『後漢書』卷十「皇后紀第十上 和熹鄧皇后」(部分)「宋紹興本」

不獲福祐、先帝早棄天下、孤心榮榮、靡所瞻仰、夙夜永懷、

感愴発中。

こちらの『後漢書』の例は、寵愛を賜った「先帝」(和帝)に先立たれた和熹鄧皇后の孤独を切々と記した一節である。夫、あるいは支えとなる人物のいない孤独と言えようか。

この様に、経史書においても「榮榮」は孤独の表現として用

いられていた様だが、特に兄弟のいない孤独に限定されてはいなかったことが確認できる。なお、經史書の十六例中、「孤」と共起するのは『後漢書』中の三例のみであり、先述の唐詩ほどは「孤」との関連が意識されていなかったと見られる。

道真が詩で「榮・榮」を掛けた鄭益恩は『後漢書』卷三十五「張曹鄭列伝第二十五鄭玄」に登場し、「玄・唯有一子・益恩」(「玄」は鄭玄)と兄弟がいなかった事を示す記述もあるが、その章の中には「榮・榮」もしくは「榮」字の用例は確認できなかった。

「榮・」は道真が、他の中国文献の用法に沿って鄭益恩及び自らの境遇に対して用いたものと推測される。また、「孤」と共起しない点は、唐詩の用法と言うよりは、『詩経』等の經史書寄りの用法であると考えられる。

二(二)、『川口大系』における「榮」の字体

本節では、『川口大系』における「榮・」の字体について検討したい。当該詩の「榮」字について、『川口大系』では特に校異の記載もなく、「(フ)冠」の抜けた「榮・」(判別のため傍点を付す、以下同)で翻刻され、訓読文でも「榮・」が用いられていた。

まず辞書類における「榮」と「榮・」の扱いについて確認すると、下の表一の通りであった。いずれの辞書とも、「榮」を本字として翻刻したのか。『文章』の諸本の「榮・」の字体については、表二の通りとなっていた。

表二から分かる通り、『川口大系』と同じ「榮・」になっているのは「寛文刊本」と「元禄刊本」の板本二本のみであり、写本では全て「榮」となっていた。この点だけで判断すれば、『川口大系』はこの「榮・」に関しては、底本の「藤井懶斎奥書本」ではなく、「寛文刊本」あるいは「元禄刊本」に従っている可能性が高いと言える。ただ、「寛文刊本」「元禄刊本」では共に踊り字を用いず「榮・榮」となっているのに対し、『川口大系』では「榮・」と踊り字を用いており、踊り字を使用する点は「藤

表一 辞書類における「榮」の字体の扱い

辞書類		字体	扱い	備考
大漢和辞典	榮	本字		
	榮・	「榮に同じ。」		
学研大漢和	榮	本字		異体字として「榮」掲載あり
	榮・	掲載なし		
漢語大詞典	榮	本字		異体字として「榮」掲載あり
	榮・	「同。榮。」		
広韻	榮	本字		
	榮・	掲載なし		

○ 中心的に熟語などを掲載している字体を「本字」とした。
○ 『広韻』は、国立国会図書館デジタルコレクションの宋刊本に拠った。

表二 『菅家文章』巻二「講書之後、戲寄諸進士」における「鶯鶯」の諸伝本上の表記

通番	伝本名	形態	成立時期	表記	備考
一	慶長本	写本	慶長年間	鶯々	
二	林道春手校本	写本	江戸初期	鶯々	
三	藤井懶齋奥書本	写本	明暦二年	鶯々	川口大系本の 底本
四	道明寺天満宮本	写本	万治二年	鶯々	
五	寛文刊本	板本	寛文七年	鶯・鶯	
六	元禄刊本	板本	元禄十三年	鶯・鶯	
七	肥前松平文庫本	写本	不明	鶯、	

○各本の表記の調査に用いた資料の情報については、稿末の「菅家文章」諸本参照元」欄に掲載した。

○「表記」中の踊り字については、最も形に近い準仮名で翻刻した。

井懶齋奥書本」を始めとする写本と同じである。

また、「藤井懶齋奥書本」に従えば「鶯」であるべき字体が『川口大系』で「鶯」となったのは、『川口大系』の出版時における活字の都合という可能性もある。本稿としては一まず、『川口大系』における『文章』の本文が、「寛文刊本」あるいは「元禄刊本」に従ったと見られる例の一つとして報告しておきたい。

なお、『文章』『後集』の索引本（川口・若林（一九七八）

によると、詩作中に「鶯」字の用例はこの「鶯・鶯」の一箇所のみであったため、『文章』『後集』の他の箇所においての「鶯」

の字体確認はできなかった。（索引本は『川口大系』を底本としているため、「鶯」字の用例は掲載がなかった。）

三、『菅家文章』巻二「絶句十首、賀諸進士及第」の「芬

芬」

「芬芬」は道真詩の用例として、『文章』に一例見られる。

○『菅家文章』巻二「一三五」絶句十首、賀諸進士及第」十之

七（全文）※訓読も底本準拠

少日偏孤凍且飢 少き日 偏に孤にして凍い且飢ゑたり

長呼孔父濟窮兒 長に呼ぶ 孔父の窮れる兒を濟ふことを

還家拝世何為檄 家に還り世を拝して 何ぞ檄を為さむ

手捧芬々桂一枝 手に捧ぐ 芬々たる桂の一枝

【川口頭注】「君はにおやかな桂の一枝を見事に折って科挙に及第し、その親を喜ばしたのである。」

この詩は題名にも記されている通り、道真の弟子達が進士（文章生）に合格したお祝いに、弟子一人一人に一首ずつ贈った十首の内の一首である。「桂一枝」は、進士及第を指す故事成語「桂の枝を折る」に由来する。「芬芬」は、その桂の枝の「におやかな」馥郁たる香りを表している。ここでの「芬芬」は植物としての桂の香りと言うよりは、進士及第の誉れの輝かしさを比喩的に表現したものと考えられる。

「芬芬」の辞書語釈は以下の通り。

〔芬芬〕辞書語釈

『大漢』①にはふさま。香りの高いさま。芬郁。芬馥。②盛で美しいさま。③乱れるさま。」

『日国』「芳気の高くかおるさま。また、広く悪臭の漂うさまをもう。」

『漢詞』①芳香。②猶紛紛。雜乱貌。」

「芬芬」は、基本の意味としては匂いが香る様子であったと考えられる。香りの表現であり、詩との相性も良さそうに思えるが、『全唐詩』には例が少なく三例しか確認できなかった。以下その三例を年代順に挙げる。

○『全唐詩』卷三十一 魏徵「五郊樂章二十首 雍和」(全文)

律心西成 氣躡南呂

珪幣咸列 笙竽備拏

苾苾蘭羞 芬芬桂醕

式資宴眺 用調霜序

○『全唐詩』卷三二二 權德輿「酬陸四十楚源春夜宿虎丘山、

对月寄梁四敬之兼見貽之作」(部分)

芳訊發幽緘 新詩比良觀

故人石渠署 美儷滿中朝

落落杉松直 芬芬蘭杜飄
雄詞鼓溟海 曠達豁煙霄

○『全唐詩』卷六〇九 皮日休「吳中苦雨因書一百韻寄魯望」(部分)

念湧為之災 拝神再三告
太陰霍然收 天地一澄肅
燔炙既芬芬 威儀乃翬翬
須權元化柄 用拯中夏酷

一例目の魏徵の例は『文章』と同じく「桂」に関連して「芬芬」が用いられている。ただ、「桂醕」は「桂の花を浮かべた美酒」(『大漢』)を指し、桂ではなく酒の香りを「芬芬」で表している可能性もある。なお、暈対として「苾苾」とあるが、「苾苾」と「芬芬」を併せ用いるのは後述する『詩経』小雅にも例があり、互いに関連深い語であったと考えられる。

二例目の權德輿の例では「蘭杜」(「香草の名」『大漢』)に係っており、桂ではないが、香りの良い植物に係る点は道真例と類似している。

三例目皮日休の例では、前二例とは異なり、植物ではなく「燔炙」(「焼いた肉」『大漢』)の香りとして用いられている。「燔炙」に「芬芬」が掛けられるのは、後述する『詩経』「大雅」にも用例が見られる。

これら『全唐詩』以外の「芬芬」の中国例としては、以下の

通り『詩経』二例と『文選』三例の計五例が確認できた。

○『詩経』「小雅 谷風之什 信南山」『新釈漢文大系』二二

詩経 中』※訓読も底本準拠

(前略)

祭以清酒 祭るに清酒を以てし

従以騂牡 従ふに騂牡を以てし

享于祖考

祖考に享す

執其鸞刀

其の鸞刀を執り

以啓其毛

以て其の毛を啓き

取其血膋

其の血膋を取る

是蒸是享

是れ蒸し是れ享れば

苾苾芬芬

苾苾芬芬たり

祀事孔明

祀事孔だ明め

先祖是皇

先祖是れ皇く

○『詩経』「大雅 生民之什 鳧鷖」『新釈漢文大系』二二

詩経 下』※訓読も底本準拠

(前略)

鳧鷖在臺

鳧鷖臺に在り

公尸来止熏熏

公尸来に止まりて熏熏たり

旨酒欣欣

旨き酒欣欣として

燔炙芬芬

燔炙芬芬たり

公尸燕飲

公尸燕飲し

無有後艱 後艱有ること無し

前者「小雅」の例は「苾苾」に続けて用いられており、先述

した魏徴の詩の「苾苾」と「芬芬」の暈対との関連が考えられ

る。情景としては、「血膋」(血と脂膏)底本解釈より)を取っ

た犠牲の牛の肉を蒸したり煮たりした匂いの「香りのよいこ

と」(底本解釈)を表している。

後者の「大雅」の例も、「燔炙」(焼き炙った肉)底本解釈

より)の、動物的な肉の「よい香り」(底本解釈)を「芬芬」

で表している。『詩経』における「芬芬」は、特に肉を焼いた

時の良い匂いを表す用法が主であったと考えられる。

次に、『文選』における「芬芬」例を見る。『文選』には、「甘

泉賦」「東京賦」「景福殿賦」の三つの賦において「芬芬」の用

例が確認できた。以下「甘泉賦」と「景福殿賦」の用例を確認

する。

○『文選』楊子雲「甘泉賦」(部分)『新釈漢文大系』八〇 文

選(賦篇) 中』※訓読も底本準拠

東燭滄海

東のかた滄海を燭らし

西燿流沙

西のかた流沙を燿らす

北燼幽都

北のかた幽都を燼らし

南煬丹崖

南のかた丹崖を煬らす

玄瓊觶饔

玄瓊觶饔として

柜鬯泔淡

柜鬯泔淡たり

脣蜜豊融 脣蜜豊融として

懿懿芬芬 懿懿芬芬たり

炎感黄龍兮 炎は黄龍を感ぜしめ

標訛碩麟 標は碩麟を訛かす

底本によると「脣蜜豊融 懿懿芬芬」は、「その良い香りは、周囲にあふれ、広がった。」と解釈されている。「拒鬯」は「くろきびで醸した香酒」(底本解釈)とされ、「芬芬」はその儀式における酒の良い香りを表していると考えられる。なお、この「甘泉賦」は『漢書』にも収められている。

○『文選』何平叔「景福殿賦」(部分)『新釈漢文大系八』

文選(賦篇)下」※訓読も底本準拠

芸若充庭、槐楓被宸。

芸若庭に充ち、槐楓宸を被ふ。

綴以万年、

綴るに万年を以てし、

綵以紫榛。

綵ふるに紫榛を以てす。

或以嘉名取寵、

或いは嘉名を以て寵を取り、

或以美材見珍。

或いは美材を以て珍とせらる。

結実商秋、敷華青春。

実を商秋に結び、華を青春に敷く。

藹藹萋萋、馥馥芬芬。

藹藹萋萋、馥馥芬芬たり。

【底本語釈】香りが高い形容。

この「景福殿賦」の「芬芬」は、建物の周囲の「芸若」「槐楓」と言った名草名木の香りの高さを表現している。ここには挙げ

なかつた張衡「東京賦」の「芬芬」例も、『詩経』「大雅」と同じく「嬭炙」に係っており、その点でこの「景福殿賦」の用例は、植物の香りに係る唐以前の「芬芬」の用例として注目すべき一例と考えられる。

以上、中国における「芬芬」の用例を見てきたが、本邦でも道真以前の例として、空海の『性霊集』と、『経国集』の用例を確認できた。以下掲出する。

○空海『性霊集』巻一「入山興」(部分)『日本古典文学大系

七一 三教指帰 性霊集』※訓読も底本準拠

君不見。々々々。

君見ずや、君見ずや、

京城御苑。桃李紅。

京城の御苑の桃李の紅なるを。

灼々芬々。顔色同。

灼灼芬芬として顔色同じ。

一開雨。

一たびは雨に開け、

一散風。

一たびは風に散ず。

飄上。飄下。落園中。

上に飄し下に飄して園の中に落つ。

【底本語釈】盛んに芳気を放つこと。

○『経国集』巻十三 源明「雑言九日翫菊花篇応製一首」(全文)

『国風暗黒時代の文学 下II』※訓読も底本準拠

翫芳菊 幾芬芬 芳菊を翫ぶ、幾芬芬。

延寿時浮王弘酒 延寿時に浮かぶ王弘が酒、

空嗟盈把夕陽曛 空しく嗟く把に盈ちて夕陽暈るることを。

【底本語釈】香くはしい様。

この二つの本邦作品の詠まれた年代は、前者の空海「入山興」は良岑安世に贈った作品とされているため、安世の没年である天長七（八三〇）年以前の作と推測される。

また後者の源明「雑言九日翫菊花篇応製一首」は天長三（八二六）年の作（『国風暗黒時代の文学 下Ⅱ』による）であり、ほぼ同時期の作品と考えられる。

両例とも「桃李」「芳菊」に係っており、果実や花の香りに対して「芬芳」が用いられている。「文章」の例も加えると、本邦においての「芬芳」は、「菊」や「桂」等の植物の香りに対して用いる傾向があったと考えられる。

今回調査できた道真以前の本邦、並びに唐代までの中国における「芬芳」の表現する匂いの対象について、「植物」あるいは「酒肉」かで分別したところ、表三のようになった。表三によると、中国において「芬芳」は『詩経』を始め、古くは酒肉の匂いに対して用いられていた事が分かる。ところが、『文選』所収の三国時代の「景福殿賦」や、唐詩においては、植物の香りに用いられる例が確認される。「芬」の部首は艸部であるため、植物に関わる香りの方が原義に近い可能性も考えられるが、今回の調査では先秦両漢期では酒肉の匂いに対しての用例しか確認できなかった。

対する本邦の「芬芳」例は、いずれも植物の香

りに対して用いられており、中国の「景福殿賦」や、唐代詩人権徳興の用法に連なるものと考えられる。また、中国における「芬芳」は、暈対などで必ず他の暈語と共起して用いられているが、本邦の源明と道真の例では、他の暈語を伴っておらず、その点は独自の用法とも捉えられる。

表三 「芬芳」表現対象物一覧（国別・年代順）

題・作者名 （作品種類）	年代	対象事例		暈語の 共起	出典	用いられ た場面
		植物	酒・肉			
小雅（詩）	先秦		● 騂牡	● 苾苾	『詩経』	儀式祭典
大雅（詩）	先秦		● 燔炙	● 欣欣	『詩経』	儀式祭典
甘泉賦（賦）	前漢		● 柅鬯	● 懿懿	『漢書』※	儀式祭典
東京賦（賦）	後漢		● 燔炙	● 薰薰	『文選』	儀式祭典
景福殿賦（賦）	三国	●	芸若 槐楓	△ 桂醕	『文選』	庭園賛美
魏徵（詩）	初唐	△	桂醕	△ 桂醕	『全唐詩』	儀式祭典
権徳興（詩）	中唐	●	蘭杜	● 落落	『全唐詩』	名勝風景
皮日休（詩）	晚唐			● 燔炙	『全唐詩』	儀式祭典
空海（詩）	平安	●	桃李		『性靈集』	都の庭園
源明（詩）	平安	●	菊		『経国集』	重陽節会
菅原道真（詩）	平安	●	桂		『菅家文章』	進士及第

○「暈語の共起」には、暈語の連続である「重暈」や、対句に暈語を配置する「暈対」が見られた用例について、共起していた暈語を掲載した。

※「甘泉賦」は、『漢書』の他『文選』にも収録されている。

△魏徵詩では、「桂」か「醕」か、あるいは両方について修飾するか、判断し難い。

また、中国・本邦を含め、今回確認できた「芬芬」の用例全てが詩や賦と言った韻文における用例であったことは注意される。散文における用例を拾いきれなかった、或いは散逸してしまつた可能性も考えられるものの、他の疊語と共起する性質など、韻文に用いられる傾向が強い語である点は認めうるだろうか。【補注】

道真詩における用例は、そうした詩語としての「芬芬」を理解しつつ、ただ重畳や疊対の様な従来の用法に拘らずに用いられた例であつたと考えられる。他の疊語と共起しないのは、『經国集』の源明の詩と道真詩のみしか確認できず、特異であるとも言える。ただこれは、他の作品が律詩や長編の古詩・賦であるのに対し、源明と道真の作品はいずれも四句以下の短編であることと関連があるとも考えられる。

四、『菅家後集』「敘意一百韻」の「慄慄」

「慄慄」は道真の用例としては『後集』に以下の一例のみ見られた。

◎『菅家後集』四八四「敘意一百韻」（部分）※訓読も底本準拠

試製嫌傷錦 試こに製つくして 錦を傷めむことを嫌ふ

採刀慎欠鉛 刀を採りて 鉛を欠かむことを慎む

兢こ馴鳳辰 兢こ兢として鳳辰ほうしんに馴なれたり

慄こ撫龍泉 慄ことして龍泉を撫なづ

脱履黄埃俗 履くつを脱ぐ 黄埃くわうあいの俗
交襟紫府仙 襟えだを交ふ 紫府しふの仙

【川口頭注】「畏怖するさま。」

この「敘意一百韻」は五言百聯から成る、論居での深い懊惱を詠み尽くした道真渾身の大作である。『川口大系』頭注によると、「龍泉」は「宝剑の名。（引用者中略）天子にかかわる語。」であり、醍醐帝を指すとされる。そして「慄慄」は、その醍醐帝に侍る道真の「畏怖」の感情であると解釈されている。「慄慄撫龍泉」は、「畏れながら帝に接し」と言つた意識ができるであろうか。

この「慄慄撫龍泉」について、焼山（二〇一〇）では「危ぶみおそれながら宝剑を撫なでた」と解釈されていた。微妙な解釈の差ではあるが、『川口大系』では帝に対する畏れ多おそざとして、焼山注釈ではびくびくとした恐怖心として、若干異なる捉え方をしているのではないかと思われる。

また、清藤（一九五三、一九七二）の翻刻では、「慄こ」が「慄こ々」となっており、「至尊の御徳を傷つけないようにと氣を配はり」（清藤（一九七二）と訳されていた。ただ、清藤（一九五三、一九七二）が底本とする『後集』貞享刊本と群書類従本を確認した（影印参照元は稿末に記載）ところ、いずれも「慄こ」となつていたので、「慄こ々」は翻刻の誤りである可能性もある。

「慄こ」の辞書語釈を確認してみると、以下の通りであつた。

〈懐懐〉辞書語釈

『大漢』一「危ぶみおそれるさま。」①威敵のあるさま。りり

しごさま。②つしむさま。」

『日国』「あやぶみ恐れるさま。」

『漢詞』一「危懼貌。戒慎貌。②嚴正貌。剛烈貌。③寒冷貌。」

辞書語釈では、第一義は「危惧」「危ぶみ恐れる」としてほぼ一定していると考えられる。焼山(二〇一〇)の解釈は、これらの辞書語釈に沿ったものと考えられる。『川口大系』の取る「畏怖するさま」は、やや意識的な解釈とも考えられるだろうか。

実際の中国における「懐懐」の用例を確認してみる。まず『全唐詩』には、韓愈に二例、杜牧に一例の計三例が確認できた。以下三例とも掲載する。

○『全唐詩』卷三三八 韓愈「永貞行」(部分)

北軍百万虎与貔 天子自将非他師

一朝奪印付私党 懐懐朝士何能為

狐鳴梟噪争署置 賜賤跳跟相嫵媚

夜作詔書朝拜官 超資越序曾無難

○『全唐詩』卷三三九 韓愈「落齒」(部分)

及至落二三 始憂衰即死

每一将落時 懐懐恒在已

又牙妨食物 顛倒怯漱水

○『全唐詩』卷五二一 杜牧「李給事中敏」二首之一(後略)

一章緘拜早囊中 懐懐朝廷有古風

元礼去帰緜氏学 江充来見犬台宮

紛紜白昼驚千古 鉄鎖朱殷幾一空

三例共「懐懐」が句頭に用いられている点が共通しているが、一・三例目については特に、「朝士」「朝廷」と「朝」に係っており興味深い。両例共、天子や君主に対しての用例であり、『川口大系』の取る「畏怖」の情景と同類の例として考える事も可能だろうか。二例目の韓愈「落齒」の例については、老齢で歯が抜けるかと心配する情景であり、畏怖の意味とは少し離れた用例と思われる。

この他の中国例としては、『書経』一例、『後漢書』二例、『晋書』二例、『隋書』二例、『文選』二例の少なくとも計九例を確認できた。以下その中から五例を挙げてみる。

○『書経』「泰誓中第二」(前略) 『新釈漢文大系』二六 書経

下二 ※訓読も底本準拠

我武惟揚、侵于之疆、 我が武惟れ揚がり、之が疆を侵し、

取彼凶残、我伐用張。 彼の凶残を取り、我が伐用て張る。

于湯有光。勅哉夫子。 湯に于いて光有らん。勅めん哉夫子。

罔或無畏、 畏るる無き或る罔かれ、

寧執非敵。

百姓懷懼、

若崩厥角。

寧ろ敵するに非ざるを執れ。
ひやうせいりかりん
百姓懷懼として、

崩るるが若く厥角す。

この例は、「人民は受（引用者注・紂王）をひどく恐れて、一斉に崩れるかのように平伏している。」（底本解釈）と解釈されており、暴君と伝えられる紂王の恐怖政治を、民が恐れる情景に用いられている様である。君主に対しての感情ではあるが、「畏怖」と言うよりは、純粹な恐怖心に近いと思われる。

○『後漢書』卷六十六「陳王列伝第五十六陳蕃」（部分）「宋紹興本」
及遭際会、協策寶武、自謂万世一遇也。懷懼乎伊、望之業矣。

この『後漢書』の例については、『漢詞』では②の「嚴正貌…剛烈貌。」（『大漢』③）の「威嚴のあるさま」に当たるか）の用例に引用されており、恐れの意味用法ではないと考えられる。

○『晋書』卷四十八「列伝第十八段灼」（部分）「金陵書局本」
当爾之時、二州危懼、隴右懷懼、幾非国家之有也。先帝以為深憂重慮、思惟可以安辺殺敵莫賢於艾、故授之以兵馬、解狄道之圍。

この『晋書』の例は、「危懼」と対になって用いられており、

「危懼」の情景として用いられていると考えられる。

○『文選』陸士衡「文賦」（部分）「『新釈漢文大系八一 文選（賦篇）下』」※訓読も底本準拠

遵四時以歎逝 四時に遵ひて以て逝くを歎き、
瞻万物而思紛 万物を瞻みて思ひ紛る
悲落葉於勁秋 落葉を勁秋に悲しみ、
喜柔条於芳春 柔条を芳春に喜ぶ。
心懷懼以懷霜 心懷懼として以て霜を懷ひ、
志眇眇而臨雲 志眇眇として雲に臨む。

この「文賦」の例では、底本の注釈に拠ると「心を引き締めた様子」として解されている。「懷懼」の辞書語釈としては、『大漢』③の「つつしむさま」に近いかと思われるが、文脈の「心懷懼以懷霜」を考慮すると、霜を想像して身を引き締める情景が考えられ、底本の「心を引き締めた様子」とする解釈が的確と思われる。

○『文選』呉質「在元城与魏太子牋」（部分）「『新釈漢文大系八一 文選（文章篇）中』」※訓読も底本準拠

至於奉遵科教 科教を奉遵し、
班揚明令 明令を班揚するに至りては、
下無威福之吏 下に威福の吏無く、
邑無豪俠之傑 邑に豪俠の傑無く、

賦事行刑資於故実 事に賦し刑を行ひ、故実に資らん、
抑亦懷懷有庶幾之心 抑々亦懷懷として庶幾の心有り。

こちらの「懷懷」についても、底本に拠ると「慎んで励もうとする」意となる。政治を公正に行うと言う誓いの文脈であり、前掲の「文賦」の「心を引き締めた様子」との用法にも近いであろうか。辞書語釈の筆頭に出る「危惧」の意味では通じ難い用例であると言える。

以上中国における「懷懷」の用例を確認してきたが、辞書語釈に見られる「危ぶみ恐れる」用法の他、『後漢書』の「嚴正」の用法や、『文選』の「心を引き締めた様子」「慎んで励もうとする」意味の用法もある事が分かった。

『後集』における「懷懷」は、道真の醍醐帝に対する忠誠心を表した場面に用いられているため、畏れ多いと言った感情も考えられるが、『文選』の用法の様に、「心を引き締め」「慎んで」誠心誠意お仕えた、と言った意味で捉えるのも自然ではないかと考えられる。左遷直前の道真の不安定な身辺を考えると、「危ぶみ恐れる」感情の吐露との解釈も適切とは思われるが、ここはあくまで醍醐帝へ仕える姿勢を表した箇所であるため、恩賜の御衣を大宰府まで持参した道真の忠誠心の深さを考慮すれば、家臣としての真摯な態度を「懷懷」で示していると捉えるべきではないだろうか。ただ、どちらの意味であったとしても、中国の用法に沿った用法である点に変わりはない。

五、『菅家後集』「箴意一百韻」の「脛脛」

「脛脛」は道真詩において『後集』中に以下の一例のみ用いられている。

◎『菅家後集』四八四「箴意一百韻（部分）※訓読も底本準拠

風摧同木秀 風に摧けて木の秀づるに同じ

灯滅異膏煎 灯滅えて膏の煎らるるに異なり

苟可管々止 苟しくも管管として止まるべし

胡為脛々全 胡為れぞ脛脛として全からむ

覆巢憎穀卵 巢を覆して穀卵を憎む

搜穴叱蚺螻 穴を搜めて蚺螻を叱る

法酷金科結 法は 金科の結ばむよりも酷し

功休石柱鐫 功は 石柱に鐫らむことを休めにき

悔忠成甲冑 忠の 甲冑と成らむことを悔ゆ

悲罰痛戈鋌 罰の 戈鋌よりも痛きことを悲しぶ

【川口頭注】「こういう状況では、どうして正直にやつて行くものが、無事で命を全うすることができよう。」

【川口補注】「脛脛」は、正直なさま・直ぐなるさま。漢書、楊惲の伝に「事何容易、脛脛者、未必全也」とあるによる。」

前章で取り上げた「懷懷」と同じく、「箴意一百韻」における用例であり、「胡為脛脛全」は二百句中の一八四句目で、作

品としては終盤に当たると。ここで「脛脛」は道真の実直な生き様を表し、奸臣の蔓延る様を示す「営々」と対置されている。続く「覆巢憎穀卵」以下の句では道真自身に降りかかる運命の苛烈さが切々と綴られている。

清藤（一九五三、一九七二）では前句の「営々止」も「わたし（道真、稿者注）が極力策を弄して その地位にとどまる」（清藤（一九七二）意味に解し、「胡為脛脛全」は「身の安全は保証し得なかつたであろう」（同書）と捉えている。焼山（二〇一一）では、『川口大系』と同じく「営々」は「私を陥れた小人たち」の形容で、「脛脛」は「正直に事を行っていく者」として解釈されている。

「脛脛」の辞書語釈については、以下の通りであった。

〈「脛脛」辞書語釈〉

『大漢』 「正直なさま。 脛脛。」

『日国』 「まっすぐなさま。 正直なさま。」

『漢詞』 「脛脛。 固執貌。」

『川口大系』の解釈ともほぼ同じ、「正直なさま」として一定していると言える。また、『大漢』『漢詞』によると、石偏の「脛脛」と通用する様であるが、その用例についても後述する。

「脛脛」については、中国および本邦の用例として、『川口大系』補注や焼山（二〇一一）でも指摘されている以下の『漢書』の一例のみが確認できた。

○『漢書』卷六十六「公孫劉田王楊蔡陳鄭伝第三十六子憚」（部分）「王先謙漢書補注本」

郎中丘常謂憚曰、聞君侯訟韓馮翊、当得活乎。憚曰、事何容易。脛脛者未必全也。我不能自保、真人所謂鼠不容穴銜糞數者也。

「脛脛者未必全也」と、「全」と共起する点は『後集』例と同じであり、用法の関連性が窺える。「脛脛」は辞書類にも以上の『漢書』の用例以外に挙例が無く、今回の調査では中国および本邦において經史書、詩詞、仏典に至るまで他の用例を見出せなかつた。道真の時代に存在した、「脛脛」を用いた何らかの他の文献が、現在までに消滅して伝わらなかつた可能性も考えられる。しかし、大学寮で講読されていた『漢書』（桃（一九八三）であれば道真もほぼ確実に通覧していたであろう点も総合して判断すると、道真がこの『後集』「敘意一百韻」において「脛脛」の手本にし得た資料は、この『漢書』の一節である蓋然性が非常に高いと考えてよいように思われる、と云うのが、今回の調査での結論である。

『漢書』は言を俟たず著名な史書であり、「脛脛」の語も中国の他書で引用されておかしくないはずだが、海を越えた道真詩の例だけが現在に残っているのは注意すべき事だと思われる。それだけ道真がこの『漢書』子憚伝の一節に感ずるところがあったのかも知れないが、語彙の博引ぶりを窺うことができる一例と言える。

なお、「脛脛」と通用するとされる「磴磴」については、『論語』二例、『史記』一例、『後漢書』二例、『晋書』一例の他、『全唐詩』でも一例確認することができた。以下『全唐詩』の用例を挙げる。

○『全唐詩』卷七九一 韓愈「城南聯句」(前略)

陶暄逐風乙 躍視舞晴蜻
足勝自多詣 心貪敵無勅
始知樂名教 何用苦拘儻
畢景任詩趣 焉能守磴磴

「守」と言う動詞と共起しており、固く守ると言う意味用法であろうか。この用例を見る限り、「脛脛」と「磴磴」はやはり通用すると考えられる。但し、『後集』の「脛脛」の箇所について、大島文庫本と太宰府天満宮一・二本が「脛々」とする(焼山(二〇一一)による)異文以外は確認できず、『後集』例はあくまでも肉月の「脛」であり、やはり『漢書』例が元となった可能性が高いと思われる。『漢書』楊惲伝についても、底本とした王先謙漢書補注本の他、宋慶元本、武英殿二十四史本、摘藻堂四庫全書薈要本、欽定四庫全書本の四板本を確認したが、全て「脛」になっていた。なぜ『漢書』では通用の「磴磴」ではなく「脛脛」を用いたのか、その理由については、今回は明らかにならなかった。

六、まとめ

本稿で扱った四語について、要点を以下表四にまとめた。「脛脛」は中国例としては『漢書』にしか確認できなかったが、「磴磴」「芬芬」「懷懷」は複数の中国文献で道真詩と同じ意味用法の用例が確認できた。また「磴磴」「芬芬」「懷懷」については、少数ながらも『全唐詩』の用例も確認でき、道真詩の用例が唐代の詩に沿った用法で用いられていた事が分かった。「磴磴」「芬芬」「懷懷」の三語は『全唐詩』にあるような唐の詩を参考にして道真が詩に用いたとも考えられるが、それぞ

表四 『菅家文章』『菅家後集』における「磴磴」「芬芬」「懷懷」「脛脛」

語例	用例所在	道真例と同じ意味用法の例が確認できた中国文献	道真例と同じ意味用法と考えられる『全唐詩』用例作者名	道真以前の本邦用例
磴磴	菅家文章 卷二	後漢書、全唐詩	齊澣(盛唐)、盧綸(盛唐)、長孫佐輔(中唐)、施肩吾(中唐)	なし
芬芬	菅家文章 卷二	文選、全唐詩	魏徵(初唐)、韓德興(中唐)	源明
懷懷	菅家後集	書経、晋書、隋書、文選、全唐詩	韓愈(中唐)、杜牧(晚唐)	なし
脛脛	菅家後集	漢書	なし	なし

れの語の用例の残る唐代詩人は様々であり、例えば夙に道真詩への影響が指摘されている白居易(例えば金子(一九七七))

の様な、特定の中国詩人の影響を指摘することは難しいと言える。また、「脛脛」の様に、詩以外から取り入れた可能性のある語もあり、「鞞鞞」「芬芬」「懷懷」についても、「後漢書」や『文選』といった唐詩以外の文献を参考にした可能性もある。

本稿として確認できたことは、「鞞鞞」「芬芬」「懷懷」「脛脛」と言った、唐詩では必ずしも好まれて用いらなかった語についても、道真は何らかの中国例に依拠し、中国でも通用する意味用法で用いていた、ということである。

七、今後の課題

道真詩の語彙については、白居易からの影響を受けたものが多いことは夙に指摘がなされている。しかし、本稿で見たように、道真詩には中国の用法に沿った語の中でも、白居易の用例が確認できない語や、あるいは唐詩に例が残されていない語も含まれていることが確認できる。これらの語彙は、道真の時代にはもともと多く用いられていたものが、今日それらの作品は散逸し、ただ道真の作品のみが残された、という可能性も考えられる。ただ、少数でも残されたそれらの語彙の中国用例を細かく確認していくことで、決して白居易の模倣に止まらない、道真作品の語彙の豊かさを明らかにしていくことができるのではないかと考える。それを明らかにするため、語例を増やし、今

後も調査を進めていきたい。

『川口大系』における『文章』の「鞞」の字体については、「寛文刊本」「元禄刊本」に拠るものではないかと推定したが、この一例のみでは『川口大系』編集時の活字の都合や、誤植の可能性も想定される。今後、この他にも「寛文刊本」「元禄刊本」に従ったと見られる箇所がないか、調査を進めたい。

注

1 『川口大系』補注では、「採刀慎欠鉛」と「懷懷撫龍泉」の句について、「私は鉛刀のなまくら刀をふるって廟堂に立つて政治に参与したが、そのなまくら刀の鉛をかきやしないかとおそれたの意。(引用者中略)しばしば大臣大将を辞謝する上表などをしたこととかかわりがあるう。」と注されている。

2 焼山(二〇一〇)における『菅家後集』の「懷懷」の前後の訳と考察を以下引用する。

【口語訳】(引用者注・「兢兢馴鳳屐 懷懷撫龍泉」の訳として) おそれ戒めて慎みながら、帝の後ろの屏風に控えたものだ(慎み慎みて帝に従ったものである)。

危ぶみおそれながら宝剣を撫でていたのである(おそるおそる帝に寄り添い補佐してきた)。

【考察】(引用者注・「採刀慎欠鉛」と「懷懷撫龍泉」二句の解釈として)「鉛刀を手にしては、(一度は役に立てても二度とは役に立たないので)めったなことをしない

ように細心の注意をし／危ぶみ惧れながら、宝剣を撫でて来たものだ」の句意となり、「自分自身が愚才であるが故に、天皇の権威に傷が付かないように慎重に政に参与し、天皇に寄り添い、慎んで仕えてきた」ことを意味する内容になっている。(引用者中略)「愚才である私が、精一杯、天皇の権威を損うことのないように細心の注意をしながら補佐をして来た」内容を強調するものとなっている表現箇所と考察した。

【補注】

「芬芬」については、『詩経』大雅・小雅の例に見られる様に、古くは盛大な儀式祭典を寿ぐ意味を持つていたと考えられる。そうした性質は「賦」における例でも確認でき、儀式の酒・肉の香ばしさや、天子の庭園の植物の匂やかさを活写する場面で用いられていた。ある種の賛美の雅語的な側面も認められると言える。しかしながら一方で、その華やかさを表す強い語感ゆえに、奢侈の極まりや華美な世俗を諷諫する意味合いをも孕む場合があったとも考えられる(「甘泉賦」や空海「入山興」)が、この点については今後も考察を重ねていきたい。

引用文献

清藤鶴美(一九五三)『菅家後草』太宰府天満宮学業講舎
清藤鶴美(一九七二)『菅家の文華』太宰府天満宮文化研究

所

金子彦二郎(一九七七)『平安時代時代文学と白氏文集第二卷 道真の文学研究篇』芸林舎

桃裕行(一九八三)『上代学制の研究』吉川弘文館

坂本太郎(一九九〇)『人物叢書 菅原道真』吉川弘文館

柳澤良一(二〇〇八)『石川県立図書館蔵川口文庫善本影印

叢書一 菅家文章』勉誠出版

烧山廣志(二〇一〇)『菅原道真研究一』菅家後集』全注釈

(二十)『有明工業高等専門学校紀要』四六

烧山廣志(二〇一一)『菅原道真研究一』菅家後集』全注釈

(二十二)『国語国文学研究(熊本大学文学部)』四

六

安部清哉・中山大輔(二〇一一)『唐詩詩語「敬枕」の漢文

訓読語としての「枕をそばだてて(聞く)(側臥)』『学

習院大学文学部研究年報』五九

今浜通隆(二〇一八)『菅家後集叙意一百韻全注釈』新典社

中山大輔(二〇二二甲)『菅家文章』菅家後集』を中心に

見た上代・中古前期の漢語疊語の受容―併せて川口久雄

氏校注旧大系本の「適々遇」を「適遇」に訂す』『人文』

二十

中山大輔(二〇二二乙)『菅家文章』菅家後集』から見た

仏教語・唐代口語の受容―疊語を例として―』『東洋文

化研究』二四

中山大輔(二〇二三)『道真』菅家文章』菅家後集』の漢語

研究(其四・鳴き声を表す疊語篇―「嗷嗷」「咬咬」「喃喃」「嘖嘖」―)(校正中)

中山大輔(予定稿)「道真『菅家文章』『菅家後集』の漢語研究(其五・「叱叱忿忿」)(口頭発表予定)

『菅家文章』諸本参照元

林道春手校本 国立公文書館デジタルアーカイブ 請求番号

二〇五―〇七四

慶長本 国立公文書館デジタルアーカイブ 請求番号 特一

二一―〇〇六

道明寺天満宮写本 http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100292484

肥前松平文庫本 http://dbrec.nijl.ac.jp/KTG_B_100223166

寛文刊本 早稲田大学図書館 請求記号 へ一六 〇〇五〇

六

元禄刊本 国立国会図書館デジタルコレクション 請求記号

八三七―七六

『菅家後集』諸本参照元

貞享刊本 早稲田大学図書館 請求記号 へ一八 〇〇五〇

六

群書類従卷一三二 国立国会図書館デジタルコレクション

請求記号 一二七―一

参考文献

『大漢和辞典(修訂第二版)』大修館書店、一九八九年

『漢語大詞典』上海辞書出版社、一九八六年

『辞源』修訂版、商務印書館、

『佩文韻府』台湾商務印書館、一九六六年

『日本国語大辞典(第二版)』小学館、二〇〇〇年

『大宋重修広韻』国立国会図書館デジタルコレクション 請求記号 WA三五一三

『全唐詩檢索系統』<http://clslib.ntu.edu.tw/fang/Database/index.html>

『唐宋词全文資料庫』http://clslib.ntu.edu.tw/CSP/W_DB/index.htm

『宋詩』<http://clslib.ntu.edu.tw/QSS/home.htm>

『漢籍電子文獻資料庫』<http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanjih.htm>

『中国哲学書電子化計画』<https://cext.org/zh>

川口久雄『日本古典文学大系七二 菅家文章 菅家後集』岩波書店、一九六六年

川口久雄『菅家文章菅家後集詩句總索引』明治書院、一九七八年

高橋忠彦『新釈漢文大系八〇 文選(賦篇)中』明治書院、一九九四年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

高橋忠彦『新釈漢文大系八一 文選(賦篇)下』明治書院、二〇〇一年

竹田晃『新釈漢文大系八三 文選（文章篇）中』明治書院、

一九九八年

石川忠久『新釈漢文大系一一一 詩経 中』明治書院、一九

九八年

石川忠久『新釈漢文大系一一二 詩経 下』明治書院、二〇

〇〇年

渡邊昭宏・宮坂宥勝『日本古典文学大系七一 三教指帰 性

霊集』岩波書店、一九六五年

小島憲之『国風暗黒時代の文学 下II』塙書房、一九九五年

小野沢精一『新釈漢文大系二六 書経 下』明治書院、一九

八五年

『国宝漢書 宋慶元本』朋友書店、一九七七年

【付記】 本稿の論述については、安部清哉先生（学習院大学

教授）にご指導を頂きました（特に、表三及び補注もご

助言により加筆しました）。この場を借りて厚く御礼申

し上げます。